

テ形節分類の一試案

従属度を基準として

加藤 陽子*

キーワード: テ形節, 従属度, スコープ, 関係の意味, 構造

要 旨

本稿は、用言のテ形(書いて、白くて、静かで、など)で接続されている複文を、従属節の主節に対する依存の程度(従属度)の違いによって分類することを目的とした。

その従属度を測定する基準の一つとして、「主節末のモダリティや否定辞のスコープによる複文の構造」という統語的側面を考察した。これらのスコープを観察することで、複文は、主節末のスコープが主節命題と従属節命題まで及ぶ構造(α 構造)と、主節末のスコープが主節の命題のみにしか及ばない構造(β 構造)に分けられた。本稿では、この α ・ β の構造の違いが、従属度を反映し、分類の統語的基準になると考えた。

また、従属度を測定するもう一つの基準として、「節間の関係の意味を成立させる要素」という意味的な側面を考えた。この要素は、① 従属節の、複文全体における命題形成の機能、② 主節・従属節間の論理関係、③ 主節・従属節間の時間・順序関係、④ 主節・従属節の述語の主語の異同、の四つである。本稿では、これらの要素が相互に関連しながら緊密に節同士が関係しあって複文を構成するものを従属度の高いテ形、これらの要素間にあまり関係がなく、節間の緊密な関係もみられないものを従属度の低いテ形、とした。

この二つの基準から、テ形節は、テ1(付帯状況)、テ2(継起的動作)、テ3(原因・理由)、テ4(並列)、テ5(発言のモダリティ成分)に分類され、テ1からテ5の順番で、従属度が低くなっていくことを述べた。

1. はじめに

述語のテ形は、節と節を繋いで文を拡張し、あるまとまった量の情報を伝達する時に使用される、使用頻度の高い形式である。この形は、日本語教育においても初級で導入され、学習者は、この形で節と節を結び付けることによって、動詞の場合は、時間軸に沿った事柄の継起的な生起や、因果関係などを表わす文を作ることを知る。しかし、学習者がその先目にするのは、初級段

* KATO Yoko: 国際大学日本語プログラム助手。

階で学習した用法、そしてその用法に当てはまる典型的な例文だけではない。テ形は、前後の節を結び付けるという構文的な働きはあっても、それ自体には意味がないという特徴をもつ。つまり、どんな意味のあり方で節が繋がれているのか、ということは、その時々で考えなければならないのである。したがって、学習者には、文脈や節内のさまざまな要素を頼りにして総合的に考えることが要求される。

それでは、このように、一見して頼るべき規則らしい規則が乏しいように見え、多岐にわたるテ形の用法を、何を基準としてどのように整理していけばよいのだろうか。

2. 先行研究と本稿の枠組み

現在までの研究では、比較的、「手段のテ」「状態のテ」のように、テ形で結ばれた節の关系的意味(用法)毎にテ形節を分類し記述する、という研究が中心であったように思われる。それには、テ形がそれ自体意味を持たないため、節の关系的意味を分類の唯一の基準として現象自体を記述する方向に向かわざるをえない、という事情があったと考えられる。しかし、現象毎の細かい記述には成果があったものの、意味解釈の仕方という問題が絡み、分類としての客観性や統一性に欠けてしまう場合があったことも否めない。これは、分類の基準を「意味」という唯一の物差しにすることの限界を示していると思われる。

一方、統語的な側面を分類基準としてテ形節の複文を文の階層的な構造の中に位置づけた南(1974)のような研究もある。これは、テ形節のみを研究対象としたものではないが、接続助詞や用言の連用形で従属節と主節が結ばれている複文(南(1974)では「従属句」)を対象に、主に従属節の中に収まる文法的カテゴリーの有無を観察することによって、もっともことがらのもの(A類)から、もっとも陳述的なもの(D類)までの階層、段階的連続を明らかにしたものである。この研究によれば、テ形節の複文は四つに分けられ、それらが段階を異にするA・B・C類すべてに分布している。

これを図示し、意味的なラベリングも併せて示すと下記ようになる。南(1974)では、A類からC類の順に、ことがらの世界から陳述の世界へ移行する、と述べられている。

- ことがらの ↑ テ 1 (A類)……状態・様子
 テ 2 (B類)……継起的・または並列的な動作・状態
 テ 3 (B類)……原因・理由
 陳述的 ↓ テ 4 (C類)……(意味的なラベリングはなされていない)

この南(1974)のテ形の分類は、二つの点で示唆に富むものだと思われる。第一点は、この分類が、節同士の关系的意味を唯一の基準としてなされたものではなく、統語的観点からなされた点である。また、第二点は、従属節の中に収まる文法的カテゴリーの有無によって文の階層的構造

を明らかにした点である。とくに、第二点目の、文を幾つかの段階に分けるという考え方は興味深い。それは、この研究が、「テ形で結ばれた節と節はただ一様に同じ強さで結びついているのではなく、主節に多くのカテゴリーを依存した従属節も、主節にあまりカテゴリーを依存せず主節から独立し一文相当に近い従属節もある」ということを示し、節の結びつきを強弱の観点から捉える視点を与えたからである。

本稿でも、南(1974)と同様に、テ形の分類を文構造の差異という点から行っていこうと考える。つまり、従属節と主節の結びつきの強さ、換言すれば、主節に対する従属節の依存の程度(以下「従属度」)が文構造に反映されると考え、従属度を、テ形節を分類する基準とするのである。具体的には、本稿 6.以降で述べるモダリティのスコープによる複文の構造パターンに、基準を求めることになる。

しかし、本稿では、多くの先行研究の中で取り上げられてきた「節同士の関係の意味」という側面を無視するわけではない。なぜなら、その「継起」や「因果関係」といった関係の意味は、本稿 7.で述べるような節同士の機能的・時間的・論理的関係に規定されたものであり、それらの要素が従属度と深く関わっていると考えるからである。つまり、本稿では、文構造と意味を相互に関連したものと捉え、その両面から従属度をキーとして分類を行っていこうと考える。

また、本稿では、テ形節の従属度を本来連続的なものであると考え、従属度のスケールの両端にあるもの、また中途にあつて、他のテ形節と何等かの示差的特徴をもつものを分類として取り上げ、これらを節間の統語的・意味的・機能的な側面から観察するという立場をとる。したがって、本稿では、テ形のすべての用法を網羅的に扱いそれらの多様な用法すべてに意味のラベリングをして分類するという事はしない。本稿の主眼は、全体の中での相互の関係が明らかになるような、従属度の高低に反映された示差的特徴をもったテ形の分類を提案することにある。では、以下で、本稿での分類と分類の理由を述べていく¹。

3. 本稿でのテ形節の分類と配列

本節では便宜上、結論を先取りして、テ形の分類と、節と節が実現する関係の意味(意味ラベル)を示す。本稿では、以下のように、示差的特徴をもつテ形節を五つ取り上げ、これらの従属度がテ1からテ5の順番で低くなっていくと考える。

¹ 本稿は述語のテ形で結ばれた、主に節を二つもつ複文を対象とする。動詞のテ形のみならず、イ・ナ形容詞の「白くて、にぎやかで」の形、名詞+ダの「本で」の形も、考察の対象とする。また、「行って来る」などの複合動詞は、分析対象からは除く。

〈意味ラベル〉

- 従属度 高い ↑ テ 1……………付帯状況
 テ 2……………継起的動作
 テ 3……………原因・理由
 テ 4……………並列

従属度 低い ↓ テ 5……………発言のモダリティ成分

テ 1 とテ 3 は、南(1974) とほぼ同様である。本稿の分類が南(1974) と異なる点は、南(1974) でテ 2 のラベルとして含まれていた「並列」という概念を「継起的動作」とは異なるものとして規定し、継起的動作とは別の階層に属するものとして従属度のスケール上の位置を新たに与えた点、また、テ 5 という範疇を新たに設けた点である。

以下に、これらの分類に属する文を掲げる。対象となるテ形には、下線が引いてある。

【テ 1】 (1) ああ、オレは定期券持って通学したいよう。(太郎 9)

(2) ヌード写真は一応親にかくして買わねばいけない。(太郎 213)

【テ 2】 (3) ねえ、ここ売って、マンション買うて、明るくて新しいところへ移りましょ
 よ。(ココア 245)

(4) その時はまず弟さんに連絡して引きとってもらおうことにしよう。(ピアノ 211)

【テ 3】 (5) でも、わたくしさびしくて気がへんになりそうですの。(氷 98)

(6) 消しすぎてあって、近眼と遠視と老眼が一度にかかったみたいだよ。

(太郎 214)

【テ 4】 (7) 買い物先でメモを忘れたことに気づいて、朝、電気がまのふたを開ければまだ
 米のまま。ふろに入ろうとすれば、浴槽の栓を忘れて湯気だらけ、などなど。
 わが家の日常のほんの一例。(以下略)

(1992年7月19日朝日新聞日曜版「いわせてもらお」一部改；原文は「気づき」)

(8) 社是 わたくしたちは

一. お客様の声に常に耳を傾けて

一. 常に価値ある情報を提供して

一. 広く地域社会の産業活動に奉仕しつづけます。

【テ 5】 (9) 正直に言って、私は両親にはあまりあいたくありません。(森上 164)

(10) 大雑把に言って産業革命の終結にいたる迄の政策・学説で種々の学者によって
 唱えられた。(日本語実力養成問題集1級:24)

テ 1 は、例 (1) (2) のように、従属節命題が主節命題の付帯状況になっているものである。(1) の従属節命題「定期券持つ」は、主節命題「通学する」にともなう事態として捉えられる。

テ 2 は、「従属節命題の事態が生起し、完全に完了した後に従属節命題とは別の事態が生起し

完了する」という、複数の事態の時間軸に沿った継起的な生起と完了を指す。(3)では「売る」という事態が生起し、完了した後に次の「買う」という事態が生起している。

テ3は、従属節命題が主節命題の原因や理由になるものである。(5)では、「さびしい」が「気がへんになる」の原因になっている。

次のテ4は、寺村(1991)で述べられている「統括命題」と呼ばれているようなある意味的範疇に属する要素を、それらの生起した時間の順番に関係なく、並列的に並べたものである。(7)(8)の例文では、それぞれ「わが家の日常のほんの一例」、「社是」という意味的な範疇に属する要素がテ形でつながれていることがわかる。

最後のテ5とは、三上(1972)でいう「発言のムード」、中右(1980)でいう「発話行為の副詞」に相当するもので、従属節自体が命題の形成にはもはや参与せず、主節をどのような態度で発言するか、というモダリティ成分になるものである。(9)(10)の例にみられるように、「言う」などの発言に関わる動詞が使われ、テ形の前に否定辞「ナイ」や、「テイル」などが付かず、形態的に固定しているという特徴をもつ。後述するが、テ5はモダリティ成分として、機能上、テ1からテ4までと異なった振舞をするため、主たる考察の対象は、テ1からテ4までとする。

以上、本節では、分類とその意味ラベルを、結論を先にする形で述べてきた。次節からは、テ1からテ5を示差的特徴を持つテ形の用法として取り上げ、この順番で従属度が低くなる、と考えた理由を二点述べていく。第一点目は、文構造の差に反映される従属度(本稿の4.~6.)、第二点目は、節同士の関係的意味(意味ラベル)を成り立たせる従属節・主節間の機能的・時間的・論理的関係、主語の異同等(本稿の7.)である。

4. 節末のモダリティによる構造と従属度

本稿では、形態的には同じテ形でありながらも、これらが従属度の観点からいくつかに分類できるのは、以下で述べる二つの異なった文構造が従属度を反映するからであり、これが、「文末のモダリティや否定辞のスコープ」という現象として現われる、と考える。それでは、その二種類の構造を観察する前に、その基になる複文のモデルを概観する。

本稿では、テ形および「ナガラ・タラ・カラ」などの接続助詞で結ばれた複文の理論モデルを寺村(1984)を基に図1のように仮定し、複文の構造を次のようなものとして捉える。

まず、本稿で取り上げる複文は、述語や述語が要求する名詞句を中心として形成された「節」

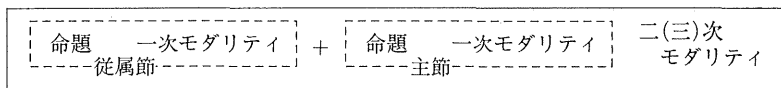


図1 複文の理論モデル

を複数もっている。「節」は、述語が要求する名詞句や副詞句と述語からなる「命題」と、述語の活用語尾である「一次モダリティ」²から構成されている。+の位置には節を接続できる接続辞（ナガラ、タラ、カラなど）が位置する。そして接続辞によって繋がれた複数の節に、文末で働くこともできる本稿 5. で述べるような二次モダリティ、終助詞である三次モダリティが後接して、節全体を後ろから包含しているのである。

このようなモデルを基に考えると、主節末に付く二次モダリティのスコープの広狭を観察した場合に、複文は二つの構造に分けられ、この二つの構造が、従属度の違いを表わしているのではないか、という予想が立つ。二つの構造とは、(11)のように、従属節命題と主節命題をひとまとめにしたものに主節の二次モダリティがかかっているもの、および、(12)のように主節命題のみにしか主節の二次モダリティがかかっているものである。

(11) [ジュースを飲みながら話を聞 k] i なさい

(12) 君が行くから僕も [行 k] o う

(11)のような複文は、主節命題のみならず、従属節命題も一まとまりになって主節末のモダリティの作用域に入るため、従属節の従属度が高い複文であるといえることができる。一方、(12)のような複文では、従属節命題は主節末のモダリティの作用を受けず、主節からは比較的独立している。したがって、このような構造を取る複文の従属節は従属度が低いといえることができる。(11)のような構造を α 構造、(12)のような構造を β 構造と呼ぶことにすると、従属度の高い複文は α 構造を持ち、従属度の低い複文は β 構造をもつのではないか、という予想が立つ。もし、この二つの構造が従属度を反映しているとしたら、本稿 3. で挙げたテ形の分類でも、従属度を反映した二つの構造の分布を観察できる筈である。

6. ではこのような予想に基づき、主節末に位置する二次モダリティがどこまでの命題をスコープとするか、そして、 $\alpha \cdot \beta$ 構造がテ 1~テ 4 とどのように関わるかを観察する。

5. 対象とするモダリティと分類

では、モダリティのスコープを観察する前に、本稿で対象とするモダリティについて述べておきたい。本研究ではモダリティを、仁田(1991)を基に「発話者の、発話時の、命題をどのようなものとして捉えるかという心的態度」と定義し、その性質から以下のように二種類に分類し、こ

² 実現期待のモダリティ(本稿 5. 参照)が主節末についた場合の一次モダリティと二次モダリティの認定は、寺村(1984)と同一ではない。本稿では、「節=命題+一次モダリティ」という等質性を保持するために、述語の活用形自身が実現期待のモダリティとなるもの(命令の「書け」など)が主節末についた場合は、主節末の一次モダリティと二次モダリティが同化する(主節末の一次モダリティが \emptyset となる)として取り扱う。

また、本稿で扱うテ形もその一つであるが、従属節の一次モダリティは、従属節の命題をまとめ、後続する節と関係する、という特徴をもつものである。

れらを従属度を測定するための対象とした³。

1. 判断のモダリティ

命題に対する発話者の断定・推量などの知覚的な判断を表わすモダリティ。

～する \emptyset (確言・断定), ダロウ, マイ (否定推量), ニチガイナイ, カモシレナイ, ラシイ, ヨウダ, ソウダ (様態用法のみ), ミタイダ, モノダ (回想の用法のみ), ナケレバナラナイ など (当為を表わす諸形式) * ハズダ・ワケダ・ノダ (説明)

2. 実現期待のモダリティ

命題の実現に対する期待を共通要素として持ち、発話者が聞き手に働きかけて何らかの行動を起こさせたり発話者自身の意志や希望などを表明したりするモダリティ。

～ナサイ, シロ, ～テクダサイ, ～テ, ～ナ, ～ヨウ (意志・勧誘), する \emptyset (意志), ～マイ (否定意志), * タイ (希望)

6. モダリティスコープによる構造と従属度

6-1. 両節末の形態的なモダリティ制約

$\alpha \cdot \beta$ 構造による従属度の違いを観察するに当たって、本節では、テ形節の複文の主節・従属節の両節末に、本稿 5. で挙げたモダリティ形式のうち、どんなものが位置可能かを考察する。それは、とくに従属節末にモダリティ形式の形態的な接続が可能か、という点をスコープ判断の基準とすることにより、まず、はっきり形でみえる形態的なもので大まかなスコープの範囲および従属度が分かると考えられるからである。たとえば、従属節末にモダリティが位置可能な (13) のような例では、従属節末のモダリティ「ラシイ」にまとめられた従属節命題と、主節末のモダリティ(確言のモダリティ; 無標)にまとめられた主節命題が、弱い結び付きでテ形によって接続されている β 構造になっていることがわかる。また、節の「因果関係」という関係の意味は保持されている。(~~~~ は従属節末のモダリティ)

(13) 今日、キヨちゃんは、すこし風邪気味らしくて、軀が熱っぽい。(ココア 72)

従って、ここでは、モダリティがテ 1~テ 4 の、節の関係の意味を壊さずに形態的に節末に位置できるか否かをスコープを測る基準として観察する。この結果を表 1 に、従属節末のモダリティの位置について、判断の基になったデータの一部を (14)~(17) に示す。

【テ 3】 鍵が開いてますように! 中に誰もいませんように! 間に合いますように! (中略)

³ 判断のモダリティのうち、ハズダ・ワケダ・ノダは前接する部分を名詞化する働きがあるので、スコープ判定のために本稿で対象とする主節末のモダリティからは除く。また、希望の「タイ」は、「実現期待」の方に分類されているが、発話者の希望を述べるだけで聞き手への積極的行動要求や発話者の直接的行動を喚起せず、「判断」と「実現期待」の中間的な性質をもつと考えられるため、従属度を測る指標としてモダリティを用いる時は判断のモダリティに属するものとして分析する。

表 1 節末の形態的モダリティ制約

	従 属 節 末		主 節 末	
	判 断	実 現 期 待	判 断	実 現 期 待
テ 1	×	×	○	○
テ 2	×	×	○	○
テ 3	△	×	○*	×
テ 4	△	×	○	○

注) ○/×: 当該のモダリティが位置可能 / 不可能, △: 「ダロウ・マイ」以外は位置可能, *: 「タイ」のみ位置不可能.

(14) どうやら祈りは三つとも叶えられたようで, すぐに足音がドアの前を通って行った. (セーラー 291)

(15) 窓から伝わってくる音に気づいたららしく, 彼も私のそばに立って, ちらと眼をやった. (ピアノ 16)

【テ 4】(16) 薄いピンク色した花がいくつも重なって, レースをひろげたみたいで, その向こうに真っ青な空が透けて見えるんだよね. (スター 155)

(17) 殺すなら最初に殺しておくはずで, 何もそんな面倒なことをしなくてもいいでしょう. (セーラー 203)

テ 3 とテ 4 では, 従属節末に主節末とは異なったモダリティが位置しても, (14)~(17) のように, テ 3・テ 4 の関係の意味を保持した文ができる. ここから, テ 3 とテ 4 では, 「ダロウ・マイ」以外, という制限付きではありながら, 従属節末にも主節末とは異なった判断のモダリティ形式の位置が可能であることが分かる. これは, テ 3 とテ 4 に, β 構造を作る可能性が形態的に存在することを示している. 反対に, テ 1・テ 2 では, 節同士の関係の意味を保持しながら従属節末にモダリティが位置した例は採集できなかった. したがって, 従属節末に主節末と異なったモダリティを位置させる, という方法では, テ 1 とテ 2 は β 構造を作る可能性が低いことが予想される.

これで, テ形の各分類と構造との対応が, おおまかに明らかになったと考えられる.

6-2. 主節末のモダリティスコープ

先の例でも観察したように, 従属節末に何らかのモダリティ成分が位置している時は, 節末のモダリティがそれぞれ前接する命題をスコープとする β 構造になる. モダリティスコープを判定するに当たって, 6-1. で挙げた形態的側面のみを手がかりにするなら, 従属節末になんらかのモダリティが入ることのできる複文は β 構造, 入ることのできない複文は α 構造と一義的に決ってしまうわけである. しかしそれでは, テ 1・テ 2 の場合, および従属節に形態的にモダリティが位置可能でも, それが位置していない (18) (19) のような場合のモダリティスコープは, 観

察できない。(~~~~は、対象となる主節末のモダリティ)

【テ 3】 (18) お礼を言われて、照れているにちがいない。(ぼくら 240)

【テ 4】 (19) この二人を信用して、そのことは考えまい。(ぼくら 215)

したがって、次に問題にしなければならないのは、従属節末に何もモダリティ形式が位置していない複文における、主節末に位置したモダリティのスコープである。

ここでは、例文を主に実例に求め、たとえば (18) では何を「ニチガイナイ」と判断したのか、(19) ではどんなことを「マイ」と決断したのかを判定する。また、モダリティは主語の人称とも関係があるため、両節の主語が同じ場合(同主語)と異なる場合(異主語)とに分けて考察した。小説などから例を取ったため、文脈からの情報も考慮してスコープを判定した。結果を表 2 に、判定の材料になったデータの一部を下に示す。表 2 の括弧内は下に掲げた例文の番号に相当する。

表 2 モダリティスコープによる構造の分布

		主 節 末 の モ ダ リ テ ィ	
		判 断 の モ ダ リ テ ィ	実 現 期 待 の モ ダ リ テ ィ
テ 1	同主語 異主語	α 構造 (20) —	α 構造 (21) —
テ 2	同主語 異主語	α 構造 (22)・ β 構造 (23) α 構造 (24)	α 構造 (25) α 構造 (26)
テ 3	同主語 異主語	β 構造 (27) β 構造 (28)	— —
テ 4	同主語 異主語	β 構造 (29) β 構造 (30)	β 構造 (31) β 構造 (32)

注) テ 1 は異主語をとらず、テ 3 は実現期待のモダリティを主節末にとらないため空欄となっている。

【テ 1】 (20) [スード写真は一応親にかくして買わ]ねばいけない。(太郎 213)

(21) [ルリ子ちゃんだと思って育て]ますわ。(氷 80)

【テ 2】 (22) [〇〇さんの奥さんは昔よくうちへ来て、椅子の上でおもらした]もんだ。

(太郎 128)

(23) そういえば、小さな研究室を作て、[なにか実験をしていた]ようですな。

(かぼ 51: 原文は「ようでしたな。」)

(24) 今、我がクラスの第 2 走者がスタートしたところだ。現在 4 位だが僕はこれからの追上げに期待している。[第 3 走者の川口が最低一人は抜いて次の梶山が二人くらい抜いてくれる]だらう。

(25) ねえ、[ここ売て、マンション買うて、明るくて新しいところへ移り]ましよ

うよ。(ココア 245)

(26) [山本さんが手紙を入れて、瀬谷さんが封をして]ください。

【テ 3】 (27) でも、わたくしさびしくて[気がへんになり]そうです。(氷 98)

(28) 消しすぎてあって、[近眼と遠視と老眼が一度にかかった]みただよ。

(太郎 214)

【テ 4】 (29) さいわい間借りしていたところのおかみさんが親切で[赤ん坊に湯も使わせてくれたりした]らしいんですね。(氷 57)

(30) 手押し車は、先端にロープがついていて、[それを通路の前方から引っ張っている]らしい。(ぼくら 265)

(31) 健康の為には、規則正しい生活をして[暴飲暴食をする]まい。

(32) 花子の様子がおかしい。熱射病にやられたようだ。

秋子はすぐに救急車を呼んで、[春子は花子から離れる]な。

以上から、従属節末にモダリティ形式が形態的に存在していない場合でも、テ1・テ2には α 構造がほとんどで、テ3・テ4ではすべて β 構造になるということが観察できる。これは、従属節と主節の主語が同じでも異なっても変わらない。

テ1からテ4までが、モダリティのスコープで判定した構造の、このような分布をみせるということは、これらが異なった従属度のスケール上に位置していること、つまり、テ1がもっとも従属度が高く、テ4に近づくに従って従属度が低くなることを示している。

以上、6-2.では、主に文脈から、 α 構造と β 構造の構造判定を行い、従属度を測定した。しかし、この二つの文構造が存在すること、および、テ形節の複文の構造が表2で観察したようなパターンを示すということは、モダリティ「ナ」のスコープと否定の焦点位置の関係、および否定辞「ナイ」のスコープを観察することによっても証明される。

それでは以下で、否定の位置と α ・ β 構造との関係を観察する。

6-3. 否定の位置と従属度

本節では、以上で観察してきた α ・ β 二つの構造が、否定の位置とどのように関わっているのかを観察する。本節で扱うのは、命令というモダリティのスコープとともに否定の焦点をもつ禁止のモダリティ「ナ」および否定辞「ナイ」である。

では、6-2.で α 構造をもつと判定されたテ1((33)(34))と、 β 構造をもつと判定されたテ4((35)(36))を比較して観察していきたい。

【テ 1】 (33) 自転車に乗って歩道をいくな。

(34) ラジオを聞いて勉強しない。

【テ 4】 (35) 注射後一時間は安静にして激しい運動をするな。

(36) この部屋は南を向いていて2×4で建てられていて樹で外から見えない。

「ナ」をテ1の複文の文末につけた(33)では、下記の(33a)(33b)が示すように、従属節命題と主節命題の、二つの否定の焦点位置が観察される。(____線部は焦点位置を表わす)

(33a) [自転車に乗って歩道をいく]な。

歩道を歩く歩行者に迷惑だから、歩道では自転車を押して歩け。

(33b) [自転車に乗って歩道をいく]な。

この歩道は幅も狭く、放置自転車があちこちにあったりして危険だ。自転車で行くならかえって車道の路側帯を使え。

(33a)のように、従属節末に否定の焦点が位置できるということは、(33)が α 構造をもつことを表わしている。つまり(33)は、「ナ」のスコープが主節命題のみならず従属節命題にも及ぶ構造をもっているのである。文脈により否定の焦点位置は変わるが、「自転車に乗って歩道をいく」という一くくりの命題が実現されぬよう命令している点では変わりがない。

また、(34)のように、「ナイ」を主節末に付けた場合、どこが否定されているのか曖昧になってしまう。従属節命題の否定「ラジオを聞かないで勉強する」なのか、主節命題の否定「ラジオを聞いてはいるが勉強してない」なのか、判然としないのである。これも、(34)において、「ナイ」が従属節までそのスコープを及ぼすことに原因があると思われる。

一方、テ4の場合はどうだろうか。まずは、「ナ」の場合を観察する。

(35) 注射後一時間は安静にして[激しい運動をする]な。

(35)では、「注射後一時間に守るべき事」という統括命題に属する要素が二つ、並列的に並べられている。この例文では、従属節命題「安静にし」に、否定の焦点があるとは考えられない。否定の焦点は、主節の命題だけにしか位置しないのである。これは、(35)が、(33)とは異なる構造、つまり β 構造をもつと考えることで説明できる。

また、否定辞「ナイ」が主節末に付いた(36)の場合も、(34)とは違って、従属節まで否定辞のスコープが及ばないことがわかる。(36)では、「南を向いていない」「2×4で建てられていない」という解釈をするのは困難である。「ナイ」のスコープは、主節命題の「樹で外から見える」のみにしか位置していない。ここからも(36)が、節同士が比較的独立した β 構造をもっていることがわかる。

以上のことから、次のようなことがいえる。テ形節の主節末にモダリティ「ナ」が位置するとき、テ1の複文では、否定の焦点が二カ所(従属節命題・主節命題)認められた。また、テ1の主節末に否定辞「ナイ」が位置した文でも、否定されていると想定できる部分が二カ所存在するので、文脈なしでは否定の位置が曖昧になることも観察された。これは、テ1が、スコープが主節命題のみならず従属節命題にも及ぶ α 構造をもっているからである。一方、テ4の複文では、「ナ」の否定の焦点が一カ所(主節命題のみ)にしか認められなかった。また、主節末に否定辞「ナ

イ」を置いても、そのスコープが主節命題のみにしか及ばないことも確認された。これは、テ4が、スコープが主節の命題にしか及ばない β 構造をもっているからである。

以上のように、「ナ」のスコープと否定の焦点位置との関係、そして主節末の否定辞「ナイ」のスコープから、二つの異なる構造の存在が確認でき、テ1・テ4が各々表2で示したような α と β の分布を示すことを述べた。この結果は、6-1.で観察した、両節末の形態的なモダリティ制約の結果(表1参照)から予想される構造の分布とも、ほぼ一致する。

以上、本節では、テ1~テ4を示差的特徴をもつテ形の用法として取り上げこの順番で従属度が低くなると考えた理由の第一点目、つまり、この分類が従属度を反映した文構造の違いによるものだけということを主張した。

7. 「関係的意味」と従属度

前節まで、従属度が反映する「文構造」という統語的な側面に注目して、本稿のテ形分類の理由を述べてきた。それでは、本節で、意味的側面に注目して、従属度と分類との関係を考察していきたい。本節で問題にするのは、テ1~テ5の「付帯状況」、「並列」などの節同士の「関係的意味」を形成する要素がどのようなものであるか、そしてそれらの要素が従属度にどのように関わるか、という二点である。

テ1からテ5までを並べ、意味ラベル(節の関係的意味)相互の関係を考察すると、次の四つの要素の特徴の束がこれらの意味を成り立たせていることがわかる。それは、① 従属節の、複文全体における命題形成の機能、② 主節・従属節間の論理関係、③ 主節・従属節間の時間・順序関係、④ 主節・従属節の述語の主語の異同である。

さらに、これらの要素は、テ1~テ5にわたって、表3のようになっている。

①は、従属節が複文全体の命題の形成にどのように関わるか、という点である。この観点から、本稿で対象としたテ形節は、テ1からテ4までと、テ5に大きく分けられる。テ1からテ4までは、従属節命題が、複文全体の命題を形成するものとして機能している。(このうち、テ1は従属節命題が主節命題に対して主節の事態進行の背景として副詞的になっており、テ2~テ4の従属節命題は主節命題に対して対等な関係に立っている。)しかし、テ5では、従属節自体が複文の命題の形成にはもはや参与せず、主節全体にかかるモダリティ成分として、主節全体に対して副詞的に機能している。

②は、従属節と主節の命題間の論理的関係の有無である。テ1・テ2およびテ4・テ5には、二つの命題間に、因果や理由帰結等の論理的関係は存在しない。それらが存在するのは、テ3のみである。また、テ4には、統括命題(寺村(1991))の存在が考えられる。

③は、従属節・主節の各々の命題の述語の事態が生起する時間関係や事態発生の順序に注目

表 3 関係の意味を成立させる要素と従属度

機能	従属節は複文全体の命題を形成し、その一部となる			命題形成せず	
	副詞的(主命)	主節・従属節共に対等な関係		副詞的(主節)	
論理関係	命題間に論理関係なし		命題間に論理関係あり	命題間に論理関係なし (統括命題有)	
時間関係	二つの事態の生起に時間関係あり 重複 従属節→主節 順序(論理)			二つの事態の生起に時間関係なし	
節主語	同主語のみ	同主語 / 異主語			従属節主語無し
ラベル	テ1 (付帯)	テ2 (継起)	テ3 (理由)	テ4 (並列)	テ5 (発言モダリティ)

注) 副詞的(主命)=主節の命題に対し副詞的, 副詞的(主節)=主節に対し副詞的, 順序(論理)=論理関係により生じる順序関係。

したものである。テ1からテ3までは、時間関係や順序が存在し、テ4・テ5は、それらが義務的ではない。さらに、テ1からテ3までは「従属節命題の事態と主節命題の事態が生起している時間に重なるの幅があるもの(テ1)」と、「従属節命題の事態が完全に終了してから主節命題の事態が生起するもの(テ2)」と、「因果という論理関係に支えられた命題同士の順序関係を持つもの(テ3)」⁴に下位分類できる。

④は、すでに南(1974)や野田(1986)などで指摘されていることであるが、テ形節の従属節の主語が、主節の主語と異なるものを持ち得るかという点である。テ1は、従属節中に主語を明示すること(*「おれが定期券持って、おれが通学したい」)も、異主語をとること(*「あいつが定期券持って、おれが通学したい」)もできない。しかし、従属節中に主語を取りえないテ5を除いて、テ1以外は同主語も異主語も許容される。

以上、節の関係の意味を構成する四つの要素と、それらがテ1~テ5でどんな特徴をみせるかを、要素毎(表3でいえば横方向)に考察してきた。これを、それらの特徴の束であるテ形の意味毎(表3でいえば縦方向)に考察すると、次のようなことがわかる。

テ1は、節間の時間関係と主語、という二つの点で、関係の制約がある。節間には時間関係が存在するし、節間の主語のあり方も、異主語とはれず、主語は従属節中に明示できない、という制約の強いものである。反対に、テ4では、それらの制約から解放されていて、テ1でみられたような節間の関係は一つもない。時間関係もなければ、主語の組合せも自由である。この、節間の関係にさまざまな制約がある、ということは、節同士の緊密な結びつきが要素される従属度の

⁴ テ3の節間にある時間の順序関係は、テ2の「継起的動作」の時間関係とは異なり、「原因は結果に先立つ」という命題間の論理関係から付随的に生まれてきたものであると考えられる。したがって、実際の事態の生起の順番は「4時から用事があって来ました」(発話時点は4時前)のように、主節→従属節ということも有り得る。ただし、従属節事態が生起することを認識したために主節事態が引き起こされる、という原因→結果の順番はこの場合も保持されている。

高い複文であるということを表わしている。反対に、それらの制約から解放されているということは、自由な関係でそれぞれの独立性を保ちながら節が結びつける、従属度の低い複文なのである。ここから、テ1からテ5までが、意味も反映した、従属度のスケール上に並ぶ分類であることがわかるのである。

このように、四つの要素の量的側面、つまり、関係の意味を成立させる四つの要素のうちの幾つが各々のテ形節の節間の関係を規定しているか、が従属度を決めると考えられる。しかし、以下で説明するように、それらの要素の質的側面もまた、従属度の決定に深い関係がある。これは、テ1～テ5がどんな特徴の束に拘束されているか、ということである。

テ1の「付帯状況」は、たとえば、同一人物の同時進行する複数の動作を一枚の絵で表わしたものである。したがって、各節の命題の述語の事態が時間的に重複していなければならず、従属節命題は主節命題に対して副詞的になる、といった制約や、異主語はとれない、といった制約に拘束される。これは、節の命題間を「一枚の絵のように分かち難く緊密に結びついたもの」と捉えているためである。

テ2がテ1より従属度が低いのは、命題の事態の時間的な重複、という関係から解放されていることにあると考えられる。「事態発生 の 順序」という時間関係をもつ「継起的動作」は、たとえば、複数の動作をその数だけ別々の紙に絵で表現し、動作の生起順に並べたものである。別々の紙に描かれた動作であるため、行動の主体が、絵毎に同一でも、異なってもよい。また、複数の異なる絵であるので、従属節命題(先行動作)が主節命題(後続動作)の事態の背景として副詞的になるということはない。このように、テ2では、重複という時間関係が失われることで、それぞれの節が「順番に並べられた複数の絵のように切り離せるもの」と捉えられ、テ1より従属度が低くなるのだと考えられる。

また、このテ2と次のテ3を分かちつ要因は、節間の論理関係だと思われる。テ3の場合、テ2とは異なり、言語の線条性に従った時間関係から解放されているため、節の結びつきは本質的には弱い。したがって、論理関係を用いて二つの節を結び付ける必要があるのである。

さらにテ4では、前述したように、節間の時間関係という大きな制約から解放されることになる。これは、言語の「線条性」から生じる「従属節の事態の生起後、主節の事態が起こる」という時間の流れに沿った順序関係や、原因→結果の論理関係の存在による順序関係から解放されることでもある⁵。したがって、テ4は、節の順番の入れ替え自由な、相互が独立した複文となるのである。また、テ4はテ3のような節間の論理関係はないものの、一文だけではなく文章・談話上で捉えられるべき「統括命題」をもつ。これは、文レベルを超えて、もっと広い単位上での

⁵ この、述語の事態発生 の 時間関係は、述語の性質(動作性/状態性の別および意志性/無意志性)と関わる問題であり、従属度と述語の種類には関係が認められることが推測される。従属度が低くなると、従属度が高い複文には現われなかった状態性述語(形容詞、「アル・デキル」などの無意志的な状態動詞)が現われることも観察される。しかし、詳しい考察については稿を改めなければならない。

論理関係を捉える方向に進んでいる、ということである。

最後のテ5を他と区別するのは、①の「従属節の、複文全体の命題形成への関わり方」である。従属節は複文の命題の一部としてではなく、主節を包み込むモダリティ成分として機能するため、節間には論理関係も、時間関係も存在しない。モダリティ成分となるため、主語も明示されない。このように、テ5は、従属節が複文全体の命題の一部を構成するテ1～テ4の複文において重要であった種々の関係から、解放されるのである。

以上のように、節間の関係的意味を成立させる四つの要素の各特徴は、量的にも質的にも従属度を決定している。以上から、節間の関係的意味もまた、従属度を反映していることが明らかになった。また、従属度のスケール上におけるこれらの位置は、本稿6.で統語的側面から観察した結果とも一致する。つまり、この二つの側面から、テ形節はテ1(付帯状況)、テ2(継起的動作)、テ3(原因・理由)、テ4(並列)、テ5(発言のモダリティ成分)に分類され、これらが従属度の高低に従って並んでいることがわかるのである。

8. おわりに

以上、本稿では「従属度」を基準にして、文構造という統語的側面、関係的意味を成立させる各要素という意味的側面の両面から、テ形の分類を提案した。以上で分類の関係的意味のあり方や、従属度のスケールにおけるこれらの位置の全体像が、大まかに明らかになったと思われる。

ただし、先行研究の意味分類で取り上げられたものが、本稿の各分類のどこに位置づけられるのかといった、各分類相互のさらに細かな関係については触れることができなかった。

今後はさらに考察を深め、従属度のスケール上に並ぶ要素間相互の関連を、包括的かつ精密に明らかにしていきたいと考える。

参 考 文 献

- 遠藤裕子 (1982) 「接続助詞「て」の用法と意味」、『音声・言語の研究』第2号, 東京外国語大学音声学研究室。
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』, 大修館書店。
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」、『日本語学』1987年6巻5号, 明治書院。
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』, くろしお出版。
- (1991) 『日本語のシンタクスと意味 III』, くろしお出版。
- 中右 実 (1980) 「文副詞の比較」, 国広哲弥編『日英語比較講座 第2巻 文法』, 大修館書店。
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』, ひつじ書房。
- 野田尚史 (1986) 「複文における「は」と「が」の係り方」、『日本語学』1986年5巻2号, 明治書院。
- 林 四郎 (1960) 『基本文型の研究』, 明治図書。

- 三上 章 (1972) 『続・現代語法序説 主語廃止論』, くろしお出版 (1959年刀江書院発行『現代語法序説主語は必要か』の復刻版).
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』, 大修館書店.
- 森田良行 (1975) 「複文の文型練習——「たら」「て」を含む文型を中心に——」, 『講座日本語教育』第11分冊, 早稲田大学語学教育研究所.
- 吉本 啓 (1993) 「日本語の文階層構造と主題・焦点・時制」, 『言語研究』第103号, 日本言語学会.
- 渡辺 実 (1953) 「叙述と陳述——述語文の構造——」, 『国語学』(服部四郎他編『日本の言語学 第3巻 文法 I』(1978)に再収), 大修館書店.
- (1971) 『国語構文論』, 塙書房.

用例出典

- 「ココア」……田辺聖子 『孤独な夜のココア』, 新潮文庫.
- 「ピアノ」……遠藤周作 『ピアノ協奏曲二十一番』, 文春文庫.
- 「セーラー」……赤川次郎 『セーラー服と機関銃』, 角川文庫.
- 「スター」……つかこうへい 『スター誕生』, 角川文庫.
- 「太郎」……曾野綾子 『太郎物語——高校編——』, 新潮文庫.
- 「かぼ」……星 新一 『かぼちゃの馬車』, 新潮文庫.
- 「森上」……村上春樹 『ノルウェイの森(上)』, 講談社文庫.
- 「氷」……三浦綾子 『氷点』, 角川文庫.
- 「ぼくら」……宗田 理 『ぼくらの七日間戦争』, 角川文庫.
- 「日本語実力養成問題集 日本語能力試験1級対策用」, 日本外国語専門学校編, 専門教育出版.
- 『朝日新聞』朝刊(日曜版), 1992年7月19日.